

水上瀧太郎全集

五卷

昭和十六年一月十五日印刷
昭和十六年一月二十日發行

水上瀧太郎全集 五卷

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

精興社印刷 長澤製本

目次

勤人	一
晩年	一九五
罹災者	二四七
女事務員	二九三
兇刃	三九一
鳩	四三二
素人小説家の経験	四六一

果樹	．．．．．	五二
命の親	．．．．．	五四
花束	．．．．．	五一
十年	．．．．．	六七
級友會	．．．．．	六三
後記	．．．．．	一

勤人

「え、と、なほ引續いて用度係では飯田三吉が月給七拾八圓也の勤續年數が九年と十一箇月。お次が同用度係では下村音彦が月給四拾五圓也、勤續二年八箇月……」

「一寸待つて下さい。下村君は月給五拾圓ではありませんか。」

「いゝえ、十二月一日から五圓昇給で月給五拾圓ですが、十一月末日現在とすれば四拾五圓です。」

「あゝ左様か。わかりました。社員はそれでおしまひで、次は小使給仕ですね。それは明日の仕事にしませう。もう、そろそろ重役會も終る頃だし、外の仕事も見て置かなければならないから。」

人事係の柏節三は、壁にかゝつてゐる大時計を見ながら、部厚な社員名簿を閉ぢた。向ひ合つて、長い間甲高い聲を出して讀み續けて居た下役の山東は、軽く頭を下げて、咽喉がからからに

なつたと見えて、二三度咳拂ひしながら、少し離れた自席に歸つた。

節三は、今迄讀合せをしてゐた賞與金調書てうしよを手にとつて見た。その或頁に、人事係主任柏節三、勤續十三年六箇月と、下役の書いた癖字くせじを見て居ると、何となく胸騒ぎさへするのだつた。普通の年と違つて、會社創立二十周年記念の爲めに、株主に特別配當のあるのは勿論の事、使用人も特別賞與が出ると云ふ噂は二三年前からあつて、此の春頃から愈々切迫した事實となつて居たが、今別室で開かれて居る重役會で、分配方法も確定的にきまる事になつてゐるのだつた。その賞與金を貰つたら如何しようと云ふ先の事迄、社員はみんな考へてゐた。節三も其の例に漏れなかつた。一昨年もねだられ、去年もねだられ、今年も殊に夏の頃から執拗しつとく妻にせびられたコオトもこしらへてやらう。子供の洋服もこしらへてやらう。自分も外套を新調しようかしら……

「おい。」

不意に後から肩を叩かれて、節三は吾にかへつた。色の褪めた、流行はやらない型の外套を着て歸支度をしてしまつた古手の社員が、目尻や口元に意味のある微笑を浮かべて立つて居た。

「愈々きまつたぜ。」

いちはやく祕密を知つた嬉しさは、酒さびの出た皺だらけの顔に、かくし切れなかつた。

「もう重役會は濟んだんですか。」

「濟んだとも。門倉さんも野澤さんも今歸つた。」

洋袴オビキのかくしに兩手を突込んで、自分丈が知つて居て他人は知らない事柄を樂しむ心持で、得意さうにやにや笑つて居る。

「それで、如何ドウきまつたんです。」

節三にも相手の得意な心持はわかつた。多少面憎くも思はれたが、さりとて、聞いてやるもんかと云ふ態度には出られなかつた。一刻も早く、自分の懐に入る金高を知り度かつた。

「君なんざあ、お職シゴト掌柄しやうがら一番先に知らなくちやあならない人なんだがなあ。」

明かに相手をじらす面白さを意識しながら、高々と笑つた後で、節三の机の上に上半身をもたせかけ、さも一大事のやうに、一段と聲を低くした。

「へえ、矢張り勤績年數に應じて呉れるんですか。」

「さうさ。普通賞與は例年の通り六箇月で、特別の方は勤績一年が月給の一箇月分、勤績五年が五箇月、十年が十箇月、二十年なら二十箇月さ。」

「どうだ驚いたらうと云ひ度いやうな顔をして、」

「まあ其處いらだらうぢやないか。上半期かみはんきの景氣ならそんな事ぢやあ濟まないんだが、下半期しもはんきはよくなかつたからね。しかし悪かあないぜ。一杯飲めらあ。」

酒くらひの男は相好を崩して笑ひながら、心持左の肩をあげて、昂然として室むろの外に出て行つた。

「柏さん。きまつたんですつて。」

先刻さうきから、二人の話を竊み聞いてゐた下役は、帳簿のかけから首を出して訊いた。

「なあに未だわかりやあしない。支配人から話がある迄はあてになるもんか。」

「けれども田崎さんは誰に聞いたんでせう。支配人に聞いたんぢやあないでせうか。」

「如何だか。あの先生もよく一人ぎめをやるからね。」

下役は一生懸命で聞き度がつたが、節三は相手になり度くなかつた。その癖自分は、十三年六箇月の勤續に對して、月給の十三箇月分貰ふ事は間違ひ無いのだが、あとの六箇月は一年と勘定するか、月割計算になるか、或は全く切捨てになるか、如何なるだらう、如何したら一番合理的だらうなどゝ考へて居た。

「柏さん、支配人さんがお呼びです。」

給仕が呼びに来たので、節三は胸をどきどきさせながら机を離れた。隣の室の澤山の人の目も、一齊に彼の背中に集中された。節三は顔が赤くなつた。

「柏君。」

人に用事をいひつける時は、面と向合つて居る時でも、必ず其の人の名前を呼びかけるのが癖で、支配人室に入つて行つた節三を見ると、支配人は待兼た様子で迎へた。

「何か御用で。」

「まあ、ずうつと、此方へ來給へ。」

多年の習慣で、上役の前に出ると足の進まなくなる節三は、戸口に直立して命令を待つたが、支配人は何時にない愛想のいゝ笑顔で、近々と誘ひ寄せた。

「此間お願ひした賞與金調の下書は出來ましたか。まだぐらうとは思ふけれど。」

「いゝえ、お急ぎといふ事でしたから五六日居残を續けて、社員の分文は丁度今出來上つたところですよ。小使給仕の方は明日中には仕上る豫定ですが……」

「それは非常な勉強でしたなあ。まだ三日四日はかゝつても爲方が無いと思つて居たんだが。」
支配人の幅の広い顔面には、底の方から自然と笑が湧上るやうな長閑な表情が浮んだ。

「實はまだ一般には發表し足りないのだが、我社も創立二十年、幸に社長其他各重役の指揮宜しきを得た事は勿論として、平素諸君の一方ならぬ御勉強によつて社業日に増し盛大となり、資産状態も倍々良好であるから、此の際二十周年を祝ふ意味で、今年は例年の年末賞與金の外に、特別賞與金を社員一同に交附する事になりました。」

内心の興奮をかくし切れない様子で、あぶらびかり 泫光のするあから顔に電氣の光を浴びながら、演説口調で云ふのだつた。

つまり、十日程前に支配人が節三を呼んで、成る可く早く調成せいするやうに命じた賞與金調書で想像出來た通り、今日の重役會に提出した原案は、勤續年數と月給額を標準としたもので、誰しも異存無く通過したのだつた。

「先づ勤續一年が十一月末日現在の月給一箇月分、勤續二年が二箇月、三年が三箇月、五年が五箇月、十年が十箇月、十五年が十五箇月、二十年が二十箇月——よろしいか。その上にだね、十年以上の勤續者及び役名のある者、即ち支配人、支店長、支店長心得、各係主任並に次席には、社長から特に包金つみきんが出る。さう云ふ事にきまつたのです。其處で過日御頼みした賞與金調書の各人交附金欄に、今お話した割合で金額を書入れて、私の手元迄提出して頂き度いのです。」

十年以上の勤績者及び役名のある者には、特別の包金が出ると云ふところで、支配人は一層聲に力を籠めて、意味深い目差めざしで節三を見た。彼は會社創立以來の勤績者で、社員中の最古參者だつた。

「もう殆んど書上げてあると云ふのだから、別段居残つて迄やつて頂くには及ばんが、しかし早方がいゝですね。御苦勞ついでにもう一奮發して頂くんですな。」

「承知しました。早速仕上しあげる事に致します。」

重大な責任があるやうな氣持がして、節三は堅くなつて答へた。

「ところで、一年未滿の者は如何いふ計算になりますでせう。たとへば今年入社の人とか、又は一年三箇月とか二年十一箇月とか云ふやうな端數のある者ですが……」

節三の頭腦かみまの中には、十三年六箇月と云ふ自分の場合が、明瞭な數字になつて現れて居た。

「あゝ、それは月割にするのが一番合理的だとは思ふけれど、計算の煩わづらを避ける爲めに、六箇月未滿切捨て、六箇月以上は一年と勘定する事にきめました。」

支配人は何の苦も無く答へたが、節三は腹の中を見透かされたやうな氣がして赤面した。あんまり自分の願つて居た事に、びつたりとはまり過ぎて居た。

「さうしますと、五箇月二十九日でも切捨て……」

一種のてれかくしで、わかり切つた事をもう一度訊いて見た。

「さう、さう。六箇月に達しさへすれば一年と見るんだ。たつた一日の違ひで損得はあるが爲方が無いさ。事務は簡便第一だからねえ、はつはつはつ。」

上機嫌のはけ口を見つけて、支配人は子供のやうに無邪氣に笑つた。節三も勤人に特有の、調子を合せた軽い笑を以て酬いた。

「それでは、忙しい處を連日の居残は御氣の毒だが、悪い話では無いんだから、ひとつ至急にやつて下さい。」

支配人は、それで用事は濟んだと云ふしらせに、肥つた腹の上に光る金鎖をたくつて、胴衣チヨツキのかくしから時計を取出して見た。

「せいぜい勉強致します。」

叮嚀に頭をさげて立去らうとした。

「柏君。」

戸口のところで呼止められて振返ると、

「君は會社に來て何年になるね。」

もう歸支度を始めて、壁にかゝつて居る外套を下しながら、支配人は訊いた。

「十三年六箇月で御座います。」

「は、あ、際どいところで一箇月分儲けられたなあ、はつはつはつはつはつ。」

節三は愈々赤くなつて、もう一度頭を下げると、逃げるやうに自分の席に歸つた。

「柏さん、いゝ話でせう。」

「いよいよきまつたんですか。」

もう退出時間は夙とつに過ぎてしまつたのに、同じ室の者ばかりで無く、他の係の者も多勢ちほせ集つて居て、心配さうな顔色さへ見せて訊くのだつた。

「なあに何でも無いんですよ。」

自分の口から會社内部の事を喋つては、後日何かの祟りがありさうに思はれて、多年臆病になり切つてゐる節三は、苦い顔をして手を振つた。

「かくさなくなつていゝぢやないか。どうせお互に貰ふもんだ。」

「矢張り田崎さんの云つた通りですか。」

若い連中は、どうでも訊き糺さなくては承知しないと云つた調子で詰寄るのだつた。

「まあそんなところと思へば間違ひないよ。」

取合つては居られない様子で、節三は椅子に腰を下すと、まぎらかしに算盤を取つて弾いた。

彼は自分の貰ふ特別賞與金額を當つて見たのだつた。

「なあんだい。かくしたつて始まらないぢやあないか。」

「別段かくしもしないけれど、支配人がいやがるからね。」

節三自身も、何もかくす必要の無い事は承知して居るのだが、さう云ふ事を餘り早く發表するのは、社長や支配人の喜ばないところなので、それをはゞかつて居る丈の話だつた。自分が口をつぶつて居るのは支配人のいひつけなんだと皆に思はれ度い——なるだけ自分では責任を負はない算段をする使用人根性を、自分自身充分感づいて居た。それが、みんなの不機嫌な様子を見ると、黙つて居る勇氣もなくなつてしまつた。

「まだ祕密なんだが、勤続一年を一箇月と見ればいゝんだ。但し六箇月未滿切捨ての、六箇月上は一年と見做す——其處いらで後はめいめいで勘定して見給へ。」

わいわい云つて居た人数が、びたりと黙つて耳を傾けたので、節三はひどく得意だつた。次の